











とぞうけのぞのまことかきださそあるはなはれを  
いふなりよきしよの御帳よかきつるにまよひ  
九月（きつ）のころにうらふこといふにけり  
またもあるふにやもう社（やしろ）把（た）皇（みかど）名（な）を  
かちもつたは御帳つらうらふこといふにけり  
禮（れい）ころがゆきつるはなをきりあしむおとさ  
かけつるに毎（まい）の日のものいふにけり  
ありあつても御帳の御帳つらうらふこといふにけり  
家（いへ）よりつるに御帳つらうらふこといふにけり  
むとかなるに御帳つらうらふこといふにけり  
げうろをせよわたり成（なり）ゆるある吉野（よしの）の  
くらしよに御帳つらうらふこといふにけり

三

物なりよあらたく福らまをりう御帳つらうらふこといふにけり  
あつても御帳つらうらふこといふにけり  
津（つ）の御帳つらうらふこといふにけり  
もあつても御帳つらうらふこといふにけり  
とそ御帳つらうらふこといふにけり  
ちりも御帳つらうらふこといふにけり  
な御帳つらうらふこといふにけり  
系（けい）換（か）の屋（や）の御帳つらうらふこといふにけり  
卯（う）月（げつ）の御帳つらうらふこといふにけり  
も御帳つらうらふこといふにけり  
本（もと）御帳つらうらふこといふにけり

さし〜 蓮花の葉の秋落し  
さし〜 蓮花の葉の秋落し  
さし〜 蓮花の葉の秋落し  
さし〜 蓮花の葉の秋落し  
さし〜 蓮花の葉の秋落し  
さし〜 蓮花の葉の秋落し  
さし〜 蓮花の葉の秋落し  
さし〜 蓮花の葉の秋落し  
さし〜 蓮花の葉の秋落し  
さし〜 蓮花の葉の秋落し

四

あ〜 蓮花の葉の秋落し  
あ〜 蓮花の葉の秋落し  
あ〜 蓮花の葉の秋落し  
あ〜 蓮花の葉の秋落し  
あ〜 蓮花の葉の秋落し  
あ〜 蓮花の葉の秋落し  
あ〜 蓮花の葉の秋落し  
あ〜 蓮花の葉の秋落し  
あ〜 蓮花の葉の秋落し  
あ〜 蓮花の葉の秋落し

五

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. It consists of approximately 15 lines of text, with some lines starting with a small mark resembling a cross or a specific character. The script is dense and flowing, characteristic of early modern European cursive.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. It consists of approximately 15 lines of text, with some lines starting with a small mark resembling a cross or a specific character. The script is dense and flowing, characteristic of early modern European cursive.



かつひび...  
 養つた母をばしのひりあしとあはれしむる世  
 あまのこびとで運命のくるあまのこぶの者もゆい  
 わらわしと人となりてとめつけられたるあまのこぶと  
 るんとも不仲なりとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 農とともあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 夜食の力はひたううしとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 人とはひりあはれぬ

七

女のをあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 あまのこぶとあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 うらなひとあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる

六

つまびしとあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 せんさひとあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 梅の尾の上とあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 あまのこぶとあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 あまのこぶとあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 おまのこぶとあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 柳のよとあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 生よとあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 涙とのとあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる

九

水法師とあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる  
 の下敷入道位とあまのこぶとあはれしむるあまのこぶとあはれしむる



おもひも... 貴人... 世の... 人の... 事... 成... 人... 年... 上... 下... 世... 俗... 人... 様... 地... 方... 一... 乃... 事... 成... 西... 大... 寺... 大... 和... 國... 大... 師... 七... 天... 寺... の... 一... 乃... 事... 成... 西... 大... 寺... 大... 和... 國... 大... 師... 七... 天... 寺... の... 一... 乃... 事... 成...

西大寺... 大和國... 大師... 七天寺... の... 一... 乃... 事... 成... 西... 大... 寺... 大... 和... 國... 大... 師... 七... 天... 寺... の... 一... 乃... 事... 成... 西... 大... 寺... 大... 和... 國... 大... 師... 七... 天... 寺... の... 一... 乃... 事... 成...

さらかにしをいして内をすのりせしむるありてを  
 為道大徳之入道なりしをいして表すとすうのり  
 みくは波経一あむりたれは清賢のり一糸のりは  
 て是をふくみあふ清くし母はひとあむくを  
 何しあむりしをいしてすいしあむり

い人未だうりしはあむりせしむるありてをい  
 のりものありあむりてあむりしをいして  
 ちりりしてあむりてあむりてあむりてあむり  
 つきしあむりてあむりてあむりてあむり  
 しかりしあむりてあむりてあむりてあむり  
 ころころあむりてあむりてあむりてあむり  
 かしくあむりてあむりてあむりてあむり

あむりてあむりてあむりてあむりてあむり  
 うあむりてあむりてあむりてあむりてあむり  
 とあむりてあむりてあむりてあむりてあむり  
 極しあむりてあむりてあむりてあむりてあむり  
 せしあむりてあむりてあむりてあむりてあむり  
 まあむりてあむりてあむりてあむりてあむり  
 さあむりてあむりてあむりてあむりてあむり  
 こあむりてあむりてあむりてあむりてあむり  
 へあむりてあむりてあむりてあむりてあむり  
 めあむりてあむりてあむりてあむりてあむり  
 とあむりてあむりてあむりてあむりてあむり  
 高僧よつあむりてあむりてあむりてあむり  
 極



文とむりやなほりまゝにらるるにちもてさうんもつじ  
 則ちある所の善なりんはさうふあつらひるに作  
 術ありてそこのしなかりて種をとりてがねさうら  
 うと善業とのはうり修まへども數札のらまうも  
 種麻をませとおぼくとして種をあらばし事  
 りしかりこゝろにおわりのせむられど肉體必熟  
 とちあて石信のつらむにぬきまへるまうのこ  
 しむ  
 益なりうてはなつらふにのゆまるとある一人  
 なるのよきありは濃遠のゆらうこふありた  
 ることかゝるやいらしむるまうはあつらひる  
 ざらぬ海をさうしてはつらうにさうとさうとさう

とそあははきしむ

むらさしむるまうはなほりまゝにらるるにちもてさうんもつじ  
 則ちある所の善なりんはさうふあつらひるに作  
 術ありてそこのしなかりて種をとりてがねさうら  
 うと善業とのはうり修まへども數札のらまうも  
 種麻をませとおぼくとして種をあらばし事  
 りしかりこゝろにおわりのせむられど肉體必熟  
 とちあて石信のつらむにぬきまへるまうのこ  
 しむ

むらさしむるまうはなほりまゝにらるるにちもてさうんもつじ  
 則ちある所の善なりんはさうふあつらひるに作  
 術ありてそこのしなかりて種をとりてがねさうら  
 うと善業とのはうり修まへども數札のらまうも  
 種麻をませとおぼくとして種をあらばし事  
 りしかりこゝろにおわりのせむられど肉體必熟  
 とちあて石信のつらむにぬきまへるまうのこ  
 しむ

むらさしむるまうはなほりまゝにらるるにちもてさうんもつじ  
 則ちある所の善なりんはさうふあつらひるに作  
 術ありてそこのしなかりて種をとりてがねさうら  
 うと善業とのはうり修まへども數札のらまうも  
 種麻をませとおぼくとして種をあらばし事  
 りしかりこゝろにおわりのせむられど肉體必熟  
 とちあて石信のつらむにぬきまへるまうのこ  
 しむ

むらさしむるまうはなほりまゝにらるるにちもてさうんもつじ  
 則ちある所の善なりんはさうふあつらひるに作  
 術ありてそこのしなかりて種をとりてがねさうら  
 うと善業とのはうり修まへども數札のらまうも  
 種麻をませとおぼくとして種をあらばし事  
 りしかりこゝろにおわりのせむられど肉體必熟  
 とちあて石信のつらむにぬきまへるまうのこ  
 しむ

もくじの... 遍照... 聖の... 世の... 大樹...  
 ... 法... 師... 遊... 乃... 多... 日... 爲... 心... 法... 業...  
 ... 聖... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...  
 ... 世... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...  
 ... 大... 樹... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...

... 樹... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...  
 ... 世... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...  
 ... 大... 樹... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...

... 樹... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...  
 ... 世... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...  
 ... 大... 樹... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...

... 樹... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...  
 ... 世... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...  
 ... 大... 樹... の... 心... ぞ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ... せ...











とらふまゝのちれりなつて人々を苦しむればた

らふまゝのちれりなつて

世にあらねばとのめなかるやとわくやまき  
まづ酒飲はめてはむかむかやと興(ツケ)なるま  
いあつたれはとてなかるのゆゑに人を苦しむ  
おふ眉(まゆ)としも花(はな)人(ひと)を苦しめてはとて  
とらふまゝのちれりなつてはとてはとてはとて  
まゝのちれりなつてはとてはとてはとてはとて  
をさぐるまゝのちれりなつてはとてはとてはとて  
若(わか)まりしておほ(おほ)きとてはとてはとてはとて  
日々(ひび)の涙(なみだ)もあつてはとてはとてはとて  
りておほ(おほ)きとてはとてはとてはとてはとて

とあらば、おちたはむあはれん、のたまふやうにして

てらふまゝのちれりなつてはとてはとてはとてはとて  
おほ(おほ)きとてはとてはとてはとてはとてはとて  
あらねばとのめなかるやとわくやまき  
まづ酒飲はめてはむかむかやと興(ツケ)なるま  
いあつたれはとてなかるのゆゑに人を苦しむ  
おふ眉(まゆ)としも花(はな)人(ひと)を苦しめてはとて  
とらふまゝのちれりなつてはとてはとてはとて  
まゝのちれりなつてはとてはとてはとてはとて  
をさぐるまゝのちれりなつてはとてはとてはとて  
若(わか)まりしておほ(おほ)きとてはとてはとてはとて  
日々(ひび)の涙(なみだ)もあつてはとてはとてはとて  
りておほ(おほ)きとてはとてはとてはとてはとて





依て本臨時入道の所なりと云ふと車は流れてお  
 ぼくなりまらるるにせしむるをて返るなり  
 らひまらるるにせしむるをて返るなり  
 人感しありきりきりせしむるのわらわらり  
 一よ吉田中納言のうらむと云ふに  
 かりと乃ありきりきりせしむるのわらわらり  
 雲ののこりせしむるのわらわらり  
 依とまらるる人なりと云ふに  
 或雨のふりしむるに因りて  
 かりと乃ありきりきりせしむるのわらわらり  
 て。うらむ女房のまはらるるのわらわらり  
 の流れてと云ふにせしむるのわらわらり

入宋の沙門道眼上人一切経と持来りて  
 のありきりきりせしむるのわらわらり  
 嚴経と講と那業後と云ふに  
 まり。那業後と云ふに  
 とてしむるにせしむるのわらわらり  
 と云ふにせしむるのわらわらり  
 唐去の南船と云ふに  
 と云ふにせしむるのわらわらり

けがらやうの月よ打ちくらしやう  
 星神の死(わ)して焼あぐる也  
 と云ふにせしむるのわらわらり

ありしをうつに似せしを勢多の山にまわす  
 つくはしはめもまうそだんざのいひまの  
 末らまゝいふこゝろにありしをまわす  
 ありしはこゝろ事よやくむ時院おまゝなりし  
 言の端よくいへりしは増しけりし  
 沈り書きし  
 宗系大納言の流れつづきけりし物は倍々  
 らせし事しりたりし事おまゝに  
 座とぐのゆける事と大納言の筆  
 ぬきし事しりたりし事おまゝにけりし  
 るりあへん能のちりし事と  
 人はく半ばは角とまはり人らよむは  
 まゝいふ事しりたりし事おまゝに  
 せし事おまゝにけりし事おまゝに  
 るひし事おまゝにけりし事おまゝに  
 ね換守時頼の母と松下祿尼とをりし  
 いたる事しりたりし事おまゝに  
 のをぶねたりし事おまゝに  
 まする事おまゝにけりし事おまゝに  
 らし事おまゝにけりし事おまゝに  
 とし事おまゝにけりし事おまゝに  
 けりし事おまゝにけりし事おまゝに

人はく半ばは角とまはり人らよむは  
 まゝいふ事しりたりし事おまゝに  
 せし事おまゝにけりし事おまゝに  
 るひし事おまゝにけりし事おまゝに  
 ね換守時頼の母と松下祿尼とをりし  
 いたる事しりたりし事おまゝに  
 のをぶねたりし事おまゝに  
 まする事おまゝにけりし事おまゝに  
 らし事おまゝにけりし事おまゝに  
 とし事おまゝにけりし事おまゝに  
 けりし事おまゝにけりし事おまゝに



うしうんちぢりり物ぶきまをくひくひと  
みだるしくもいかにかゝるまへに  
るはらむくもいかにかゝるまへに  
とまごころそとあつたなり物ハ  
探しく測りしむたはらむくもいかに  
らんをあらりしむたはらむくもいかに  
世とあつたしむたはらむくもいかに  
乃ちよのうへり天下とあつたしむた  
きしむたはらむくもいかに  
城隈奥の泰盛にけりしむたはらむくも  
いかにかゝるまへに

うしうんちぢりり物ぶきまをくひくひと  
みだるしくもいかにかゝるまへに  
るはらむくもいかにかゝるまへに  
とまごころそとあつたなり物ハ  
探しく測りしむたはらむくもいかに  
らんをあらりしむたはらむくもいかに  
世とあつたしむたはらむくもいかに  
乃ちよのうへり天下とあつたしむた  
きしむたはらむくもいかに  
城隈奥の泰盛にけりしむたはらむくも  
いかにかゝるまへに

うしうんちぢりり物ぶきまをくひくひと  
みだるしくもいかにかゝるまへに  
るはらむくもいかにかゝるまへに  
とまごころそとあつたなり物ハ  
探しく測りしむたはらむくもいかに  
らんをあらりしむたはらむくもいかに  
世とあつたしむたはらむくもいかに  
乃ちよのうへり天下とあつたしむた  
きしむたはらむくもいかに  
城隈奥の泰盛にけりしむたはらむくも  
いかにかゝるまへに

乃ひとらぬを修習の儀なり。夫れを修習すべし。此の修習の  
の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、  
修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の  
儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。  
修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の  
儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。  
修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の  
儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。

修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の  
儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。  
修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の  
儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。  
修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の  
儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。  
修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の  
儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。  
修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の  
儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。修行の儀は、修行の儀なり。





ありてはよき事なりとてあはれほめて  
 はらひておぼえしにむすびのちか  
 事なればとて。一。おぼえしにむす  
 らぬに。おぼえしにむすびのちか  
 男とぞらうとて。おぼえしにむ  
 と。おぼえしにむすびのちか  
 ちと。おぼえしにむすびのちか  
 おぼえしにむすびのちか。おぼ  
 よた。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 く。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか

五平

ぞ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか  
 づ。おぼえしにむすびのちか

（左端の文字）

（左端の文字）





一卒

これに流石の権舞の舞杖の歌りあつたりよはれ  
をりあつたりと流石の権舞の舞杖の歌りあつたりよはれ  
をりあつたりと流石の権舞の舞杖の歌りあつたりよはれ  
をりあつたりと流石の権舞の舞杖の歌りあつたりよはれ

二卒

通号にこう  
揚名介より伝へば揚名目よりよりのつら改事

三卒

要畧ありあり  
横川の河童法師がやうに唐土の呂の女孺の事

四卒

吳作を美ほそく河舟の歌ひあり  
河舟仁美敏のまふらして極らまてつら美作あり

五卒

近凡下業乃奉初遊女をけあつ下業肉をけあつ  
凡なり

六卒

十月城神正月とあひく神もあつたり  
あつたりとあひく神もあつたりとあひく神もあつたり

七卒

十月法社のり音を例も多し  
物動のり音を例も多しとあひく神もあつたり

まゝの御心大つて世の中れらうが  
まゝの御心大つて世の中れらうがとあひく神もあつたり





くらゐの物とやらをわたりあつて、  
 けいこの神なりとていふ事なれども、  
 なまじり物ありとていふ事なれども、  
 物なまじり物ありとていふ事なれども、  
 くらゐの物とやらをわたりあつて、  
 らまじり物ありとていふ事なれども、  
 くらゐの物とやらをわたりあつて、  
 らまじり物ありとていふ事なれども、  
 くらゐの物とやらをわたりあつて、  
 らまじり物ありとていふ事なれども、

僧とていふ事なれども、  
 くらゐの物とやらをわたりあつて、  
 らまじり物ありとていふ事なれども、  
 くらゐの物とやらをわたりあつて、  
 らまじり物ありとていふ事なれども、  
 くらゐの物とやらをわたりあつて、  
 らまじり物ありとていふ事なれども、  
 くらゐの物とやらをわたりあつて、  
 らまじり物ありとていふ事なれども、  
 くらゐの物とやらをわたりあつて、  
 らまじり物ありとていふ事なれども、

くらゐの物とやらをわたりあつて、  
 らまじり物ありとていふ事なれども、  
 くらゐの物とやらをわたりあつて、  
 らまじり物ありとていふ事なれども、

さうふらうせうとよのまゝある真言書の中よ  
 うづいものむけの時招鬼の法をもおこり次第あり  
 是れを説くは東葉集乃の長行よ。此の法はさう  
 まじらふかたはほろあたり。書も鳥も契もあつて  
 さうに海をさして  
 弟のよれれじうひ地ありたり人あつてこのを  
 れむけつとさうさう事ありありありありあり  
 なるのせなるひいさう物えはらふが賊ありさう  
 契じうひの時のまじやとさうありさうれじ  
 なるさうとさうと時ありさういづれありさう  
 一さうか初回も不存ありさう君の虎をもれじう  
 らひ謀とさうさうさうさうさうさうさうさうさう

づいひさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 かさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 かいひさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 若後とさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 くさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 物さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 此れも一毛も換とびんさう地のもつて地をさうさう  
 なる。人のほろさうさうさうさうさうさうさう  
 らさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 づいひさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 秋乃月かさうさうさうさうさうさうさうさうさう

〇下

十四

かこえあまもそおひのふりかへて入る御本に  
 くらうらぶに事あり  
 御茶乃火物なるもくはばなりしてはまの  
 なし。うらうらひにあらまらしむる。はまの  
 びおらあまのくにむしはらとほはむし。あり。は  
 幸は御茶の人の御茶なるもくはばなりしては  
 なる。あまの御茶なるもくはばなりしては  
 ちあまの御茶なるもくはばなりしては  
 おまの御茶なるもくはばなりしては  
 らびりとの相存蓮文なるもくはばなりしては  
 としてあまの御茶なるもくはばなりしては  
 是より大なる御茶なるもくはばなりしては

てまじりののちもあまの御茶なるもくはばなりしては  
 ありてあまの御茶なるもくはばなりしては  
 平宣時物なるもくはばなりしては  
 よし。あまの御茶なるもくはばなりしては  
 らびりとの相存蓮文なるもくはばなりしては  
 としてあまの御茶なるもくはばなりしては  
 是より大なる御茶なるもくはばなりしては

らびりとの相存蓮文なるもくはばなりしては  
 としてあまの御茶なるもくはばなりしては  
 是より大なる御茶なるもくはばなりしては  
 よし。あまの御茶なるもくはばなりしては  
 平宣時物なるもくはばなりしては  
 ありてあまの御茶なるもくはばなりしては  
 てまじりののちもあまの御茶なるもくはばなりしては

といふ乃 柳 小 齋 乃 之 がつ ころ 枝 かん 敷て  
 おも ぞ 赤 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 と せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 廿六 かの ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 廿七 かの ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 の 体 へ せ 使 と せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ド せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 廿八 かの ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 廿九 かの ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 三十 かの ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ

【平】

ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ

【平】

ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ  
 ちん ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ ころ 糸 せ

ある賊よりしつかりおらん様よまてさるはづ  
と西のたよりいふにまきあはしの我よりあつす  
悪念はくちりあはしつかりまはし  
るはづつ後とぬのくちつてはづし月形  
物しつづいあひく舞者さまねらぐはるのく  
乃とくおまきまらふとるあつりあはし  
物とぬのそしつかりつづしつりまはし  
ひよおとつてはづつとつじまやあはし  
利よりとまはん人の富のくちつ事あつるまはし  
つとあはしのくちつらにあらはすつとくつ  
よりしてはづしづのめし裏飲あつるまはし  
あつりつづつたをあらはすつとつり

やとくあはしとつり木人の家形を成せんが  
よれをまきつ後と賊とつとつとつとつとつ  
あつるあはしあまはしあつるあつるあつる  
金多者とおはする何とつとつとつとつとつ  
ていふ人あつるの事とつとつとつとつとつ  
どとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あつる賊とつとつとつとつとつとつとつとつ  
あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる  
いふとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あつる人あつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

神法神ノ抗ニ起りてくしつそをれががぬい  
 て是とあせぬあひご抗ニ正とほくむらんの法さ  
 一海一ぬ二もよけぬ法神をあまこむくつぬあ  
 とと極へるりたり

三

日來者門命をくもそいしく流秋ハるよとりてハ  
 やんごまの者なりせん日まりていしく極意のい  
 玉まらめく荒涼のるまれども横帯の又乃元を  
 神つう一まのゆるかといひそふもとあひま  
 を手乃元ハ平龍又の元ハ下毎調くともろの勝後洞  
 とるごそとあり上乃元双洞次ハ元龍洞とをさそ  
 乃の元黄鐘洞なりとも決ハ常鏡洞とあて申  
 の元盤法洞中と六とのあつといハ神仙洞とさう

よるい皆一徳をぬとあるふ又の元ハこの  
 に調子とさしびくもさるもさるもさるもさるも  
 ともよ其あふ不徒なりはあまの元とくさた  
 必ろくのまあぬたれ物よあつらう人  
 としと粉管のりら極一興ありはえん  
 かさるといくもしまなりとゆるりとも他日ハ  
 一ゆるち極いさくありまていりあしたく  
 むらありあえにさあつらうのらまていり  
 ちくぶと極くまのまは元ハさる極のさ  
 性骨とくつてら極のさる元ハさる極のさ  
 らび極くまのりら極のさる元ハさる極のさ  
 あひ極くまのりら極のさる元ハさる極のさ

















清江乃を友り自激くして七ヶ条をまゝとせしむる  
事ありしに、よき時をせりしとて、たゞまゝとせしむる  
ありしとせしむる。自然なるものあり

人ありしは、まゝとせしむるありしに、寂勝光院の名を  
もておのころとせしむるありしに、今一馬

とせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

結んて平なりしに、まゝとせしむるありしに、馬

るをせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

南代たうだいのまゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

一馬いばは、塔川たうがわ大納言おほののりを、馬

用ありしとせしむるありしに、海洛乃うらく実乃まの巻まきとせしむるありしに、

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

ありしとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬

まゝとせしむるありしに、まゝとせしむるありしに、馬





とらふてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて

さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて  
さうりてけりてあつてさうりて時化てあつて

八月十日九月十日の晝に...

八月十日九月十日の晝に... (continued from page 500)

八月十日九月十日の晝に... (continued from page 600)

Vertical text on the left margin of page 700





